

【研究論文】

「教職実践演習（幼稚園）」における協同学習の効果 — 集団での学びに焦点を当てて —

○山田 悠莉* 滝沢 ほだか* 横田 典子* 平尾 憲嗣* 米窪 洋介*

要 旨

平成 23 年度から開講している教職実践演習（幼稚園）では、協同学習での効果を活用した集団での学びを展開している。

本研究では、教職実践演習（幼稚園）での学生の自省（アンケート）から、授業のねらいの一つである学級経営の視点の深まりに着目し、本授業における集団での学びの効果、協同学習の意義について検討を行った結果、活動全体を通して、集団を意識した活動が展開されていること、また、学生が集団の中で様々な立場を経験し多角的な目を持ち、様々な立場で自らの役割を果たそうとする姿勢を持っていること、適宜振り返りを行うことでより集団での学びが深まることが明らかとなった。これらの活動を支えるのは、担当教員による適切な指導、学生の活動後の振り返りであり、それらを有効に機能させるためのチーム・ティーチングを中心とした担当教員間の連携が求められていることも読み取れた。

キーワード：「教職実践演習（幼稚園）」、集団、学級経営、協同学習

I. はじめに

平成 23 年度から実施している「教職実践演習（幼稚園）」は、全学年を通じた「学びの軌跡の集大成」と位置づけられ、必要に応じて不足している知識や、技能の定着を図ることがねらいとして設定されており、再確認すべき四つの視点が示されている。

- ① 使命感や責任感、教育的愛情等に関する項目
- ② 社会性や対人関係能力に関する項目
- ③ 幼児児童生徒理解や学級経営に関する項目
- ④ 教科・保育内容等の指導力に関する項目

本学の「教職実践演習（幼稚園）」の授業では、この 4 つの視点を持ち、授業のねらいを達成できるような内容を構成している。

特徴として、現場（付属幼稚園）における学級経営案を基にした見学を実施していること、保育現場を想定し学生同士の関わりを重視した学びの体験を設定していることが挙げられ、授業内容を学習することで学生一人ひとりが集団での学びを経験し、学級経営に必要な視点を体得することを授業の一つの

ねらいとしている。学生たちは、学級経営の様子を見学、他者との関わり、集団の中でのロールプレイを繰り返すことで、協同学習を通じて学びを深めていくことが期待される。

教職実践演習（幼稚園）では、6 クラスに 8 名の担当教員を配置し、教員同士が相互に連携しながらチーム・ティーチングをしていく体制を導入している。授業開始当初から、この体制で授業運営を行いながら様々な課題を受け止め、毎年授業改善を重ねてきた。授業運営における課題については、「岡崎女子短期大学における教職実践演習（幼稚園）初年度実践報告—教職実践演習の実施に係る課題—」より抜粋（以下引用）

「初年度実施を経た課題としては次の 4 点を指摘したい。第一に、「教職実践演習（幼稚園）」のねらいを常に意識できるように授業担当教員間での話し合いをもつこと、(中略) 第三として、グループやクラス単位での計画立案、実践等を行った部分の振り返りや改善には十分な時間を確保することである。(中略) この科目の実施においては、さらなる教員間の共通理解と事前の打ち合わせ、教員自身の振り返りとよりよい方向への改善の努力が求められる」¹⁾

*岡崎女子短期大学

と記された。

第一の課題である、担当教員間の話し合いについては、担当者同士での話し合いを重ねるための時期、時間、タイミングが慣習化し、効率的かつ丁寧な準備を行うことができるようになってきている。第三の課題であるグループ、クラス単位での計画立案、実践等の改善、振り返り時間の確保については、整理はできているものの、学生が何を学び、その力をどの場面で身に付けているのかを明確に把握することができるまでに至っていない。これまでの先行研究では、発表形式の違いによる学生の意識分析の推移を行い、多少の差は認められるものの、授業全体を通じて学生の意識が向上していることが理解できた。加えて、学生たちがどの場面で、学びを深めているのかをより詳細に分析することが求められていることが明らかとなった。よって、本研究では、教職実践演習（幼稚園）での学生の自省（アンケート）から、授業のねらいの一つである学級経営の視点の深まりに着目し、本授業における集団での学びの効果、協同学習の意義について検討を行うこととした。

II. 授業における協同学習の位置づけ

「教職実践演習（幼稚園）」が位置づけられている幼児教育学科第一部2年次、第三部3年次後期2コマ「教職実践演習（幼稚園）」の授業計画を表1のように設定した。

表1 授業計画

回数	授業内容
1	履修カルテ記入・教育過程、長期指導計画
2	月の指導計画作成 幼児教育祭についての説明
3	付属幼稚園見学(学級経営について学ぶ)
4	付属幼稚園園長講話
5	各クラス計画案提示 コンベ(計画案説明)を行う
6	クラスの内容に従って計画全体像決定 クラス別活動を開始
7~12	各クラスねらいに従って、ロールプレイによって表現しながら カウンセリングマインドについて学ぶ
13	付属幼稚園を招いてのリハーサル
14	幼児教育祭1日目
15	幼児教育祭2日目
16	総括(振り返り)、履修カルテ記入

本学の教職実践演習（幼稚園）では、集団での学びを強く意識した内容で、展開・構成している。「教職実践演習（幼稚園）」の設置理由にある「早期離職の回避」「子ども、保育者と真摯に向き合うことができるコミュニケーション力の育成」という目標を達成できるようになっている。

主な特徴としては、常にPDCAサイクルを意識し、毎授業の記録を用いて振り返りを実施すること、年指導計画、月指導計画、学級経営案を基にした付属幼稚園見学の実施及び、園での行事運営を想定し、模擬保育と見立てロールプレイをしながら実践を積み重ねていく点にある。また、授業の総まとめとして学科の伝統行事である「幼児教育祭」で成果発表することが設定されている。授業での活動は個々での学びを確かめながら、集団での学びを中心に行われ、特に授業後半はほぼクラス活動が中心に展開されていく。

授業開始当初は、行事に向けての準備時間であるというこれまでの授業イメージが抜けず、授業前半での学びと後半のクラス活動の関係性が浸透しきれていなかった。その点については、担当者同士の振り返りを重ね、学生に働きかける方法に工夫を重ねてきたこと、学びの記録の追跡や、成果の中で学生が見出した視点の洗い出しについて研究を進めながら、授業改善を積み重ねることで、授業全体を通じた系統性が生まれ、学生の意識も変容している様子見られるようになってきた。

今回着目した「集団での学び」を経て学生が得るべきであろう力については二つの視点から捉えている。一つ目は、保育現場において他者と協同して仕事をすることができる力、二つ目は学級集団をまとめる力である。一つ目の保育現場で他者と協同する力については、職場の一員として報告、連絡、相談を行うことや、自らの保育を謙虚に受け止め、先輩や同僚の助言を受け入れながら成長できるように努める謙虚で誠実な姿勢である。その姿勢は、問題に直面した際にも独りで抱え込まず対応できることも指し、早期離職や職場での人間関係の課題の対処へと役立つであろう。二つ目の学級集団をまとめる力は、集団の中にいる個々の特性を把握することや、誰にでも公平かつ、親しみを持って接する、他者を受容する柔軟な姿勢が考えられる。職場での人間関係構築はもちろん、保護者との関係や接し方、子どもたちを集団の中で育てていく際の配慮・留意点も含まれている。

本年度は、教職実践演習（幼稚園）の授業の特色

の一つである「協同学習」が学生たちにどのように働きかけているのかを検証し、より集団での学びを深めるための示唆を得たいと考え調査を実施した。

Ⅲ. 調査方法

対象は、平成 26 年度本学幼児教育学科第一部 2 年生 2 クラス 199 名および、第三部 3 年生 2 クラス 73 名、計 272 名である。

研究方法は、毎授業後（全 16 回分）に質問紙調査を実施し 5 項目の設問に対し 5 段階の自己評価で回答を求める。その結果を質問項目ごとに平均値を求め、学生の集団における意識の変化を分析する。初回から、総括までに実施した計 16 回のアンケートの数値の変化から、集団での学びを通じた意識の変化を読み取る。設定した質問項目は教職実践演習における到達目標及び目標到達の確認指標例を参考に作成した。質問項目は以下の表の通りである。

表 2 質問項目

質問①	他者の意見やアドバイスに耳を傾けるとともに、理解や協力を得ながら、自らの役割を果たすことができる。
質問②	集団の一員として、独りよがりにならずに、協調性や柔軟性を持って活動にあたることことができる。
質問③	先生や仲間の意見・要望に耳を傾けるとともに、連携、協力しながら活動に対処することができる。
質問④	誰とも気軽に顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど、親しみをもった態度で接することができる。
質問⑤	他者からの指摘を真摯に受け止め、取り巻く状況を理解し、公平かつ受容的な態度で接することができる。

Ⅳ. 結果と考察

今回、質問紙調査で得られたデータを、質問項目別、所属別、活動場所別に分析を行った。各項目ごとに詳細に分析を行い、学生たちの意識の深まりについて理解を深めたい。

1) 質問項目別分析

① 質問項目①他者の助言の受容

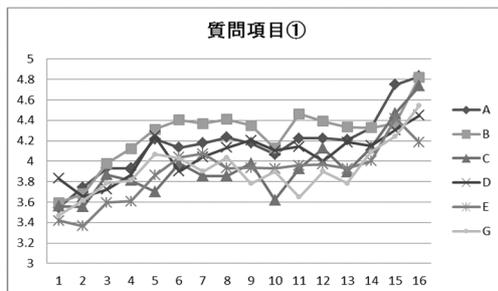


図 1 質問項目①

質問項目①は、「他者の意見やアドバイスに耳を傾けるとともに、理解や協力を得ながら、自らの役割を果たすことができる」という質問について、クラスごと毎回の平均値を出し比較を行った。

この質問項目の特徴として、キーワードにある「他者のアドバイス」の他者とは、指導している教員、クラスのリーダー、クラスの仲間や他クラスの学生を指している。授業内で設定された伝え合いや振り返り、教員からの指導を受け止めた様子が、数値の変動に影響を及ぼしている。

特徴として G クラス以外の 5 クラスが、10 回目の授業の時に数値が大きく減少している。この 10 回目は、活動が中盤に差し掛かってきた時期であり、各場所で教員も交えた進捗状況を確認する活動（中間発表や、話し合い）が行われたことが影響しているのではないかと推測できる。クラス活動が始まった 6 回目から、幼児教育祭前日の 13 回目まで多少の増減が見られるものの、一定の数値を保ち続けている。質問項目①から読み取れる学生たちの学びは、クラス活動という集団での学びを通じて、絶えず自分の役割について考えながら、責任を持って役割を遂行しようとする姿勢を持っていることが考えられる。

② 質問項目②集団の一員としての協調性

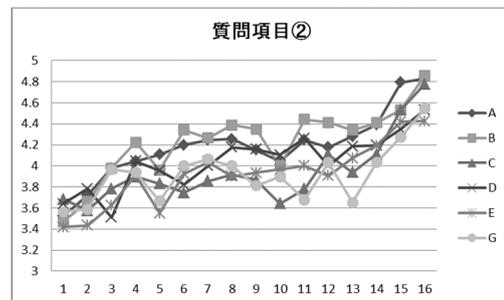


図 2 質問項目②

質問項目②では「集団の一員として、独りよがりにならずに、協調性や柔軟性を持って活動にあたることことができる」という質問項目について回答を求め、各回の平均値をクラスごとに比較した。

この質問項目では、集団の一員として行動する際に、他者と気持ちを合わせる協調性や、相手に合わせる臨機応変な対応、他者を受け止めようとする柔軟性を持つようとする気持ちを図る。

特徴としては、4 回目の付属幼稚園園長講話の回に数値が上昇している。前回見学で得た学びを基に講話を聞くことで、学びが深まり集団への意識が焦

点化されたのではないかと考えられる。ねらいを持って活動を展開し、その内容について振り返りを行うという経験を授業の中で繰り返していくことで、PDCA サイクルを意識した活動が展開されている。活動の総括となる 16 回目の授業の際に最高値を示していることから、振り返りをすることで集団での学びがより深まる様子が読み取れる。振り返りを適宜行うことの大切さを再認識した。

また、13 回目の附属幼稚園児を招いてのリハーサルでは数値が大きく下がっているクラスが多く見られた。この現象は、キーワードにある「協調性や柔軟性を持って活動にあたる」が機能しなかったのではないかと推測できる。これまで学生同士でロールプレイを繰り返しながら構築してきた活動を、直接子どもたちと関わりを持つことで、意外な反応や、予想外の展開が起これ、その対応に苦慮した様子が伺える。幼児教育祭本番の 14 回目以降は数値が上昇していることから、集団でその問題を解決しようと努力したことが予想されるため、他の質問項目との関連も視野に入れてより詳細な分析を行いたい。

③ 質問項目③連携、協力

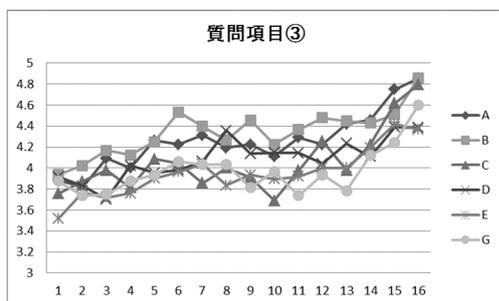


図 3 質問項目③

質問項目③では「先生や仲間の意見・要望に耳を傾けるとともに、連携、協力しながら活動に対処することができる」という質問項目について各クラスの平均値を求め分析を行った。

この項目が、5 つの質問項目の中で一番変動が大きく、クラスごとに独自の波形を示し、特徴を掴みにくい状態になっており、各回上がったたり、下がったりを繰り返しながら展開している様子が読み取れる。言い換えれば、活動内容に影響を受けやすいということが読み取れる。この項目の「先生・仲間の意見」、「連携・協力」というキーワードが回答をする際に活動と繋げてイメージをしやすく、授業内で起こった課題や成果が反映されやすいことが考えられる。これらのキーワードが内省に反映されやすい

ことは、学生らが先生や仲間の意見を受け止めより良くしようとする姿勢、協力、連携する楽しさや喜びを感じながら活動しようとする姿勢の表れであると捉えられ、集団での学びの意義を読み取ることができる。

また、特筆すべき点として、6 回目クラス活動決定・話し合いで数値が上昇している。コンペティションを行い活動場所を決定する活動を通じて、リーダーを中心に自分が所属する集団を再認識したのではないかと推測できる。競い合いをしたことも働き、喜びや悔しさ、リーダーへの感謝等様々な気持ちを受容し、改めて集団で自分がどのような役割を果たすことができるのであろうかを考えて行動しようとしているのではないだろうか。

同様に 10 回目のクラス活動（話し合いや中間発表会を実施した）の際に数値が低下している傾向が見られ、困難な状況こそ「協力、連携」に対する意識が高まっている様子から、課題対応能力の向上が期待できる。

④ 質問項目④親しみを持った態度

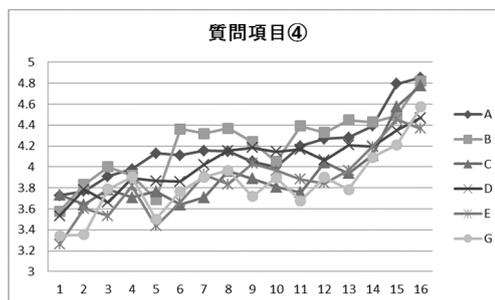


図 4 質問項目④

質問項目④では「誰とでも気軽に顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど、親しみをもった態度で接することができる」という質問項目について各クラスの平均値を求めてクラスごとに比較を行い分析を行った。

特徴として、B クラスが 6~8 回目まで高い数値を示していることが挙げられる。質問項目③との関連も考えられ、クラス活動を始めた当初の時期のやる気と団結力が感じられる。

この質問項目も質問項目③と同様、クラス差の変動が大きく特徴がつかみにくいが、子どもたちと直接関わりを持つ 13 回~15 回目では、右肩上がり数値が大きく上昇している点は類似している。活動の中で子ども達と楽しみながら関わりを持った満足感、充実感が汲み取れる。この項目のキーワードに

ある「誰とでも」「親しみをもった態度」が仲間同士から、子どもへと置き換えられていることが読み取れた。

第三部のEGクラスについては、開始当初の数値が低くなっており、この点については、第一部と第三部の比較で後述したい。

⑤ 質問項目⑤公平かつ受容的な態度

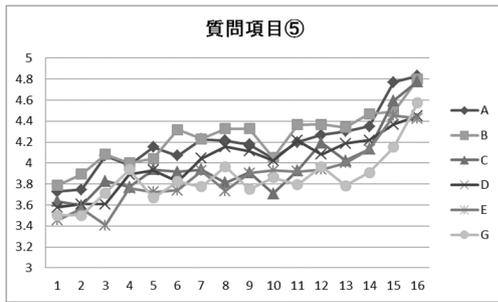


図5 質問項目⑤

質問項目⑤では「他者からの指摘を真摯に受け止め、取り巻く状況を理解し、公平かつ受容的な態度で接することができる」について、各クラスの平均値を求めて分析を行った。質問項目のキーワードにある「他者」とは、場面ごとに異なる教員、仲間、園長先生、他クラスの学生等を指しており、集団の中で自分の状況を掴みつつ、他者の気持ちを受け止めながら行動している様子を示しており、活動全体を通じて変動が見られる。

また、他の質問項目でも見られた14回から16回まで数値が大きく上昇している様子からは、子どもと接する中で受け止める受容的な態度を意識した活動が展開できている様子を読み取れた。子どもの期待や、要望を受け止めながら活動を行った様子や、16回目の総括では、学びを吸収しようと受容的な態度で振り返りをしているのではないかと推測できる。

2) 第一部・第三部の比較

分析の結果のクラスによる差が、集団の持つ性質によるものかを分析するために第一部と第三部の比較を行った。

第一部は全日制の過程であり、教職実践演習（幼稚園）を履修するまでに、クラス単位での授業や活動機会を多く経験しており、学内の行事にクラス単位で参加をしてきているため、集団形成しやすい環境にある。第三部は午前だけの過程で、就業と学業を両立するという趣旨のもと、様々な学生が在籍しているため、クラス活動の経験は第一部と比較する

と少ない状況である。

第一部と第三部の毎回の平均値を比較すると、全ての回で第一部の方が高い数値を示している。波形は右肩上がりの同じような傾向を示しており、特に13回目（付属幼稚園リハーサル）から幼児教育祭当日を経て、16回目の振り返りを行う回まで大きく上昇している。子どもと触れ合う活動を経験し、振り返りを行うことで学びが深まったことが理解できた。

また、第一部は、10回目のみ特徴的な数値低下が見られた。第三部については、活動前半にあたる5回目に一番低い数値を示している。この差については、教職実践演習における協同学習に入るまでのクラス活動経験の差ではないかと推察できる。

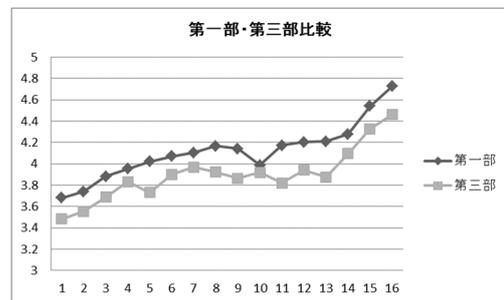


図6 第一部・第三部比較

しかしながら、その差は常に0.3点程の低い数値の差を保ちながら同じような波形を示し最終的な幼児教育祭、総括に向けて同様に最高値を示していく様子からは、集団での学びを経験し成長していく姿を捉えることができ、協同学習の意義を読み取ることができた。集団の性質はあまり影響しないことが読み取れるが、明確に示されてはおらず他角度からの分析が必要であろう。

3) 活動場所別比較

幼児教育祭では、4つの活動場所（SKホール、大体育室、6212教室、ホワイエ）を用意し、それぞれの特徴を活かした活動を展開した。各活動場所で、集団での学びに特徴があるのかを読み取るために活動場所別の平均値を求め分析を行った。6クラスの内訳は、SKホール2クラス（B・C）、大体育室2クラス（D・E）、6212教室1クラス（G）、ホワイエ1クラス（A）となっており、活動場所別に16回の推移について比較を行った。

どの活動場所でも、16回目の総括時に最高値を示している。6212教室を担当したGクラスの変動が大きく、毎回大きく上がったり、下がったりを繰り返しながら、幼児教育祭当日の14回目に大きく数

値を上げている。一番大きな差では 1.1 点変動があり、集団の中で起こりうる様々な感情を受け止めながら活動している様子がアンケートに影響をもたらしている様子が窺える。

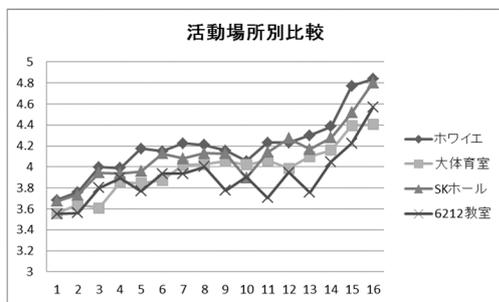


図 7 活動場所別比較

また、ホワイエ、SK ホール、6212 教室での劇を中心とした活動については、幼児教育祭から総括への数値の移行が見られた。大体育室では、そのような特徴は見られず、平行線を辿っていった。この特徴からは、SK ホール、ホワイエ、6212 教室で行われた劇を中心とした活動については、幼児教育祭当日までの活動プロセスの中で、集団での学びを多く経験し、当日子どもとの関わりの中で関わり意義を再確認し学びを深めているのではないかと推測できる。制作を中心に活動を展開している大体育室は、幼児教育祭当日多くの子どもと、学生一人ひとりが直接関わりをもち、触れ合う活動の中で関わり意義を深めていることが読み取れる。いずれのプロセスも自ら任された役割を果たすことで得られる充実感を十分感じていることが読み取れること、また、総括の時間にしっかりと振り返りを行うことで、集団の中で経験する様々な体験、感情が学生自身の内省に深まりをもたらしている様子が窺え、協同学習の経験がもたらす集団での学びの意義が明確になった。

4) 全体の推移

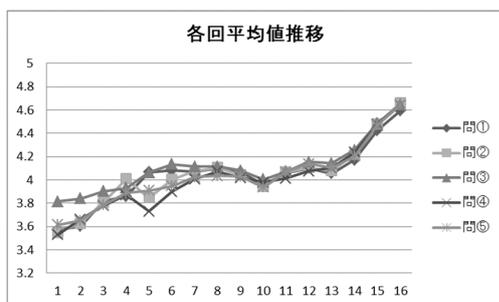


図 8 各回平均値推移

全体の推移を分析すると、初回から総括までの値は、右肩上がりとなっている。各質問項目の分析からも読み取れるように、学生たちが学級経営に必要な、責任感、公平性、受容的態度、協調性などを意識しながら活動したことで集団での学びを通して実感が深まっていく様子が窺える。

特に、全体の数値が大きく上がったのは、3 回目の付属幼稚園に向いての学級経営についての観察と、16 回目の総括であった。3 回目の付属幼稚園見学の際に、「学級経営を学ぶ」という課題を明確に提示したことにより集団に対する意識、学級をまとめる保育者を観察しようとする意識が高まったことが考えられる。アンケート項目を子ども、保育者に置き換えながら、内省を行い自らの学びとする前向きな姿勢を汲み取るができる。

また、16 回目の総括の際に振り返りを行うことで、これまでの学びを振り返り、教職実践演習(幼稚園)の授業における協同学習の意義を学生一人ひとりが深く実感したことが数値の上昇につながったと推測できる。また、7 回目以降は全設問 4.0 以上になり高い数値を示していた。特に 9 回目から 12 回目までのロールプレイを中心としたクラス活動では高数値を保ち続けた。クラスの中で様々な役割を務めながらロールプレイを繰り返すことで他者を意識した活動が継続的に展開できたことが、集団での学びの深まりにつながったと考えられる。最後に、14 回目、15 回目は授業の成果を発表するための活動「幼児教育祭」当日にあたり、子どもと関わりの中での達成感や満足感を味わうと同時に、学生たちがクラスで一体感を感じていることが理解できた。

V. まとめ

授業全体を通じて、集団を強く意識した活動が展開され、数値の上昇から協同学習の効果を読み取ることができた。特に現場との連携、学びの振り返りを行う際に意識が強くなることが明らかとなり、ロールプレイを継続して行うことで集団での自らの役割を常に意識していることが読み取れた。

質問項目別の比較からは、活動内容に応じた数値の変動から、学生たちが質問項目に頻出するキーワードを多角的に捉えて解釈し内省に活かしていることが読み取れた。当初のねらいとして挙げられた 2 つの課題(集団の一員としての役割、学級経営を行う視点)が意識されていることが窺え、ロールプレイを繰り返しながらカウンセリングマインドを学

ぶクラス活動を通じた協同学習の意義を十分に味わいながら学びを深めていることが理解できた。

また、第一部、第三部の比較、活動場所別の比較では、多少の変化はあるものの、同じような傾向を示しており、授業のねらい達成にむけて、教職実践演習（幼稚園）での指導の充実が読み取れた。課題について精査を重ね、改良を重ねてきたことに対して一定の成果が得られたのではないかと推測できる。併せて、第一部と第三部の差は、学生たちの個々の性質によるものなのか、各回の振り返り記録分析を行う等更に詳細な検討が必要であろう。いずれにせよ集団の特性を理解した上での指導の展開が必要であり、今後もより丁寧な担当教員間での情報共有の大切さが求められている結果となった。

まとめとして、活動全体を通して、集団を意識した活動が展開されていること、また、学生が集団の中で様々な立場を経験し多角的な目を持ち、様々な立場で自らの役割を果たそうとする姿勢を持っていること、適宜振り返りを行うことでより集団での学びが深まることが明らかとなった。これらの活動を支えるのは、教員による適切な指導と、振り返りであり、それらを有効に機能させるためのチーム・ティーチングを行う際の担当教員間の連携が求められていることも読み取れた。

VI. 今後の展望

教職実践演習を開講して5年目を迎え、学生たちの実態を把握し課題を設定した上で、実践力を身につけるための授業内容の精査が進んできたように感じている。

毎年授業に関するアンケート調査を行い、授業改善に努めてきた成果が読み取れ、教職実践演習（幼稚園）の授業の充実が窺えた。この充実は、授業開始当初から担当教員同士でのチーム・ティーチングの体制を整備し、毎回授業の振り返りの機会を持ち、学生たちの学びを振り返る活動を積み重ねた結果であると感じている。

今後の展望としては、活動自体が集団での学びに働きかけていることは理解できたが、この学びで得た視点が実際に保育現場で学級経営を行う際にどのように働くのか、卒業生の追跡調査も含めてさらに追究が必要であろう。また、成果発表として実施している幼児教育祭へのつながりを感じている様子が理解できたが、その意義をどのようなかたちで学生が捉え、活動に活かしているのかを検証することも

視野に入れていきたい。

今後も担当教員で力を合わせ、学生の学びの集大成となる授業としての充実を目指し、よりよい授業改善に努めていきたい。

本報告に関する調査は、平成27年保育士養成協議会研究大会での発表をより詳細に分析しまとめたものである。

謝辞

本論文執筆にあたり、授業運営において、鳥居恵治先生・野田美樹先生（岡崎女子短期大学幼児教育学科）にご協力いただきましたこと深く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 中村治人、大岩みちの：岡崎女子短期大学における教職実践演習（幼稚園）初年度実践報告—教職実践演習の実施に係る課題—東海・北陸地区私立大学教職課程研究連絡懇談会『東海教師教育研究』第27号 pp.37-46, 2013年

参考文献

- ・平尾憲嗣、滝沢ほだか、山田悠莉、米窪洋介、横田典子、野田美樹、鳥居恵治、大岩みちの、赤羽根有里子、小野隆「教職実践演習（幼稚園）」における意識調査の分析：発表形式の違いによる保育実践に関する学生の意識の推移」岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要第48号 pp.27-34, 2015年
- ・文部科学省「教職実践演習（仮称）について」中央教育審議会 2006年
- ・文部科学省：幼稚園教育要領（平成20年度告示第26号）2008年
- ・厚生労働省：保育所保育指針（平成20年度告示141号）2008年
- ・山田悠莉、妹尾美智子、鳥居恵治、大岩みちの、佐善圭、水谷誠孝、保育内容を実践に生かす取り組みとしての幼児教育祭 3—効果的なチーム・ティーチングを行うために—岡崎女子短期大学研究紀要第44号, pp.35-41, 2011年
- ・米窪洋介、山田悠莉、鳥居恵治、小野隆、大岩みちの、佐善圭、「教職実践演習（幼稚園）実践報告・共通理解の必要性—相互理解における活動の変改について—岡崎女子短期大学研究紀要第47号, pp.33-40, 2014年